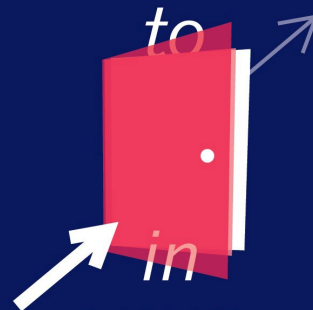


社会の多様化や求められる大学教育

ー「知の総和答申」をどう読むかー



「なりたい自分」に
なっていく。

自己紹介

森 朋子

2020年より学長職

専門は高等教育・学習研究

散歩好き

動物好き

92,90歳の両親と同居



- ✓ 第13期中央教育審議会委員（2025－）
- ✓ 文部科学省中央教育審議会大学分科会委員（2025－）
- ✓ " 質向上・質保証システム部会副部長（2025－）
- ✓ " 教育・学習の質向上に向けた新しい評価の在り方WG主査（2025－）
- ✓ " 大学設置分科会 設置計画履行状況等調査委員（2022-）
- ✓ " 大学設置・学校法人審議会（大学設置分科会）特別委員（2022-）
- ✓ 日本学術振興会 地域活性化人材育成事業～SPARC～委員会委員（2022-）
- ✓ " 知識集約型社会を支える人材育成事業委員会委員（2021-）
- ✓ 大学基準協会 大学評価研究所研究員（2024-）
- ✓ 国立大学協会事業実施委員会研修企画小委員会専門委員（2024-）
- ✓ 内閣府規制改革推進室 規制改革推進会議専門委員（2021-2023）

本日のラインナップ...

1. はじめに
2. 大学の役割
3. 今、教育政策が行おうとしていること
4. 分厚い中間層を育成する大学ができること
5. クロージング



1. はじめに 教育政策の基盤となる背景

VUCA時代

先行きが不透明で、変化が激しく、未来の予測が困難な時代



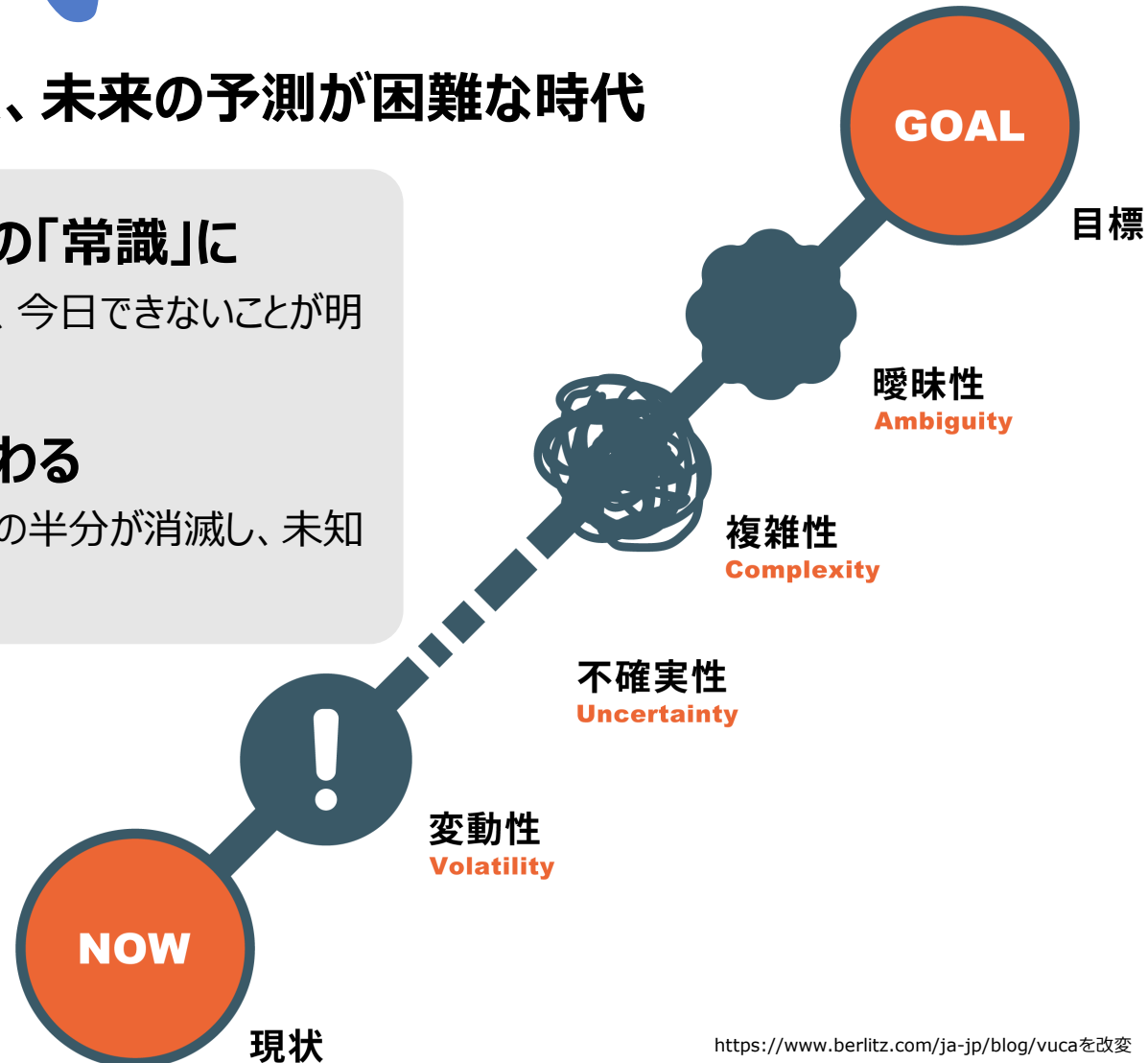
今日の「非常識」が、明日の「常識」に

新しいテクノロジーが次々と生み出され、今日できないことが明日には常識になる



世の中の「職業」が入れ替わる

AI, ロボットの進化により、今ある職業の半分以上が消滅し、未知なる職業が次々と誕生する

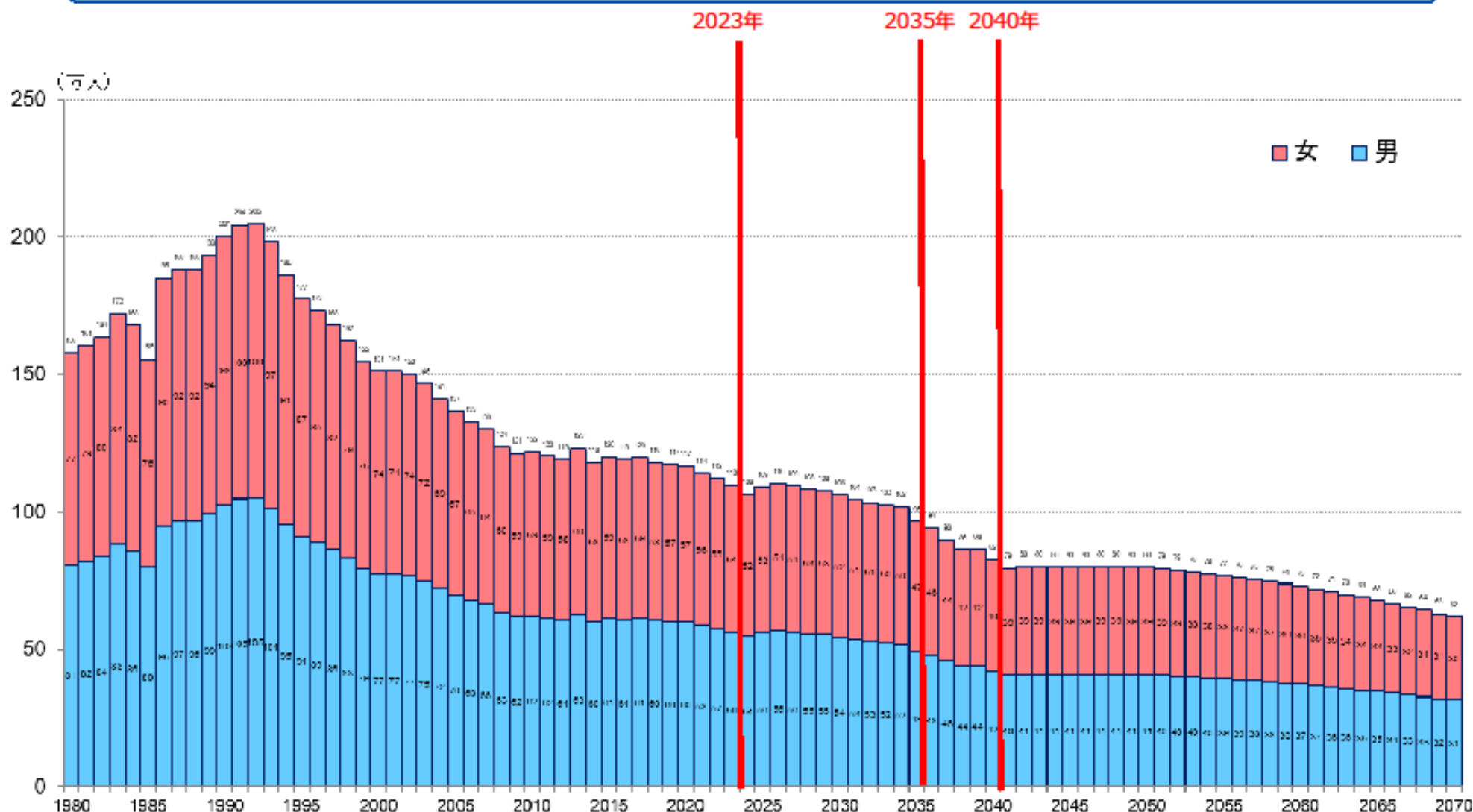


<https://www.berlitz.com/ja-jp/blog/vucaを改変>



18歳人口(男女別)の将来推計

- 我が国の18歳人口の推移を見ると、2005年には約137万人であったものが、現在は約110万人まで減少している。
- 今後、2035年には初めて100万人を割って約96万人となり、さらに2040年には約82万人にまで減少するという推計もある。



(出典) 2022年以前は文部科学省「学校基本統計」、
2023年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(令和5年推計)(出生中位・死亡中位)」を元に作成

社会が求めている人材とは

6,000以上の中小企業「 7 割近くが「人手不足」

日本商工会議所「人手不足の状況および多様な人材の活躍等に関する調査」2023

**一万件を超える有効回答の中で、大企業では62.1%が
人出不足**

帝国データバンク「人手不足に対する企業の動向調査」2023



高度成長期の
働き手



経済界・
自分のキャリア
社会のWellbeingに貢献

どのような職業でも必要なのは...

Research & Development + 学び続ける力

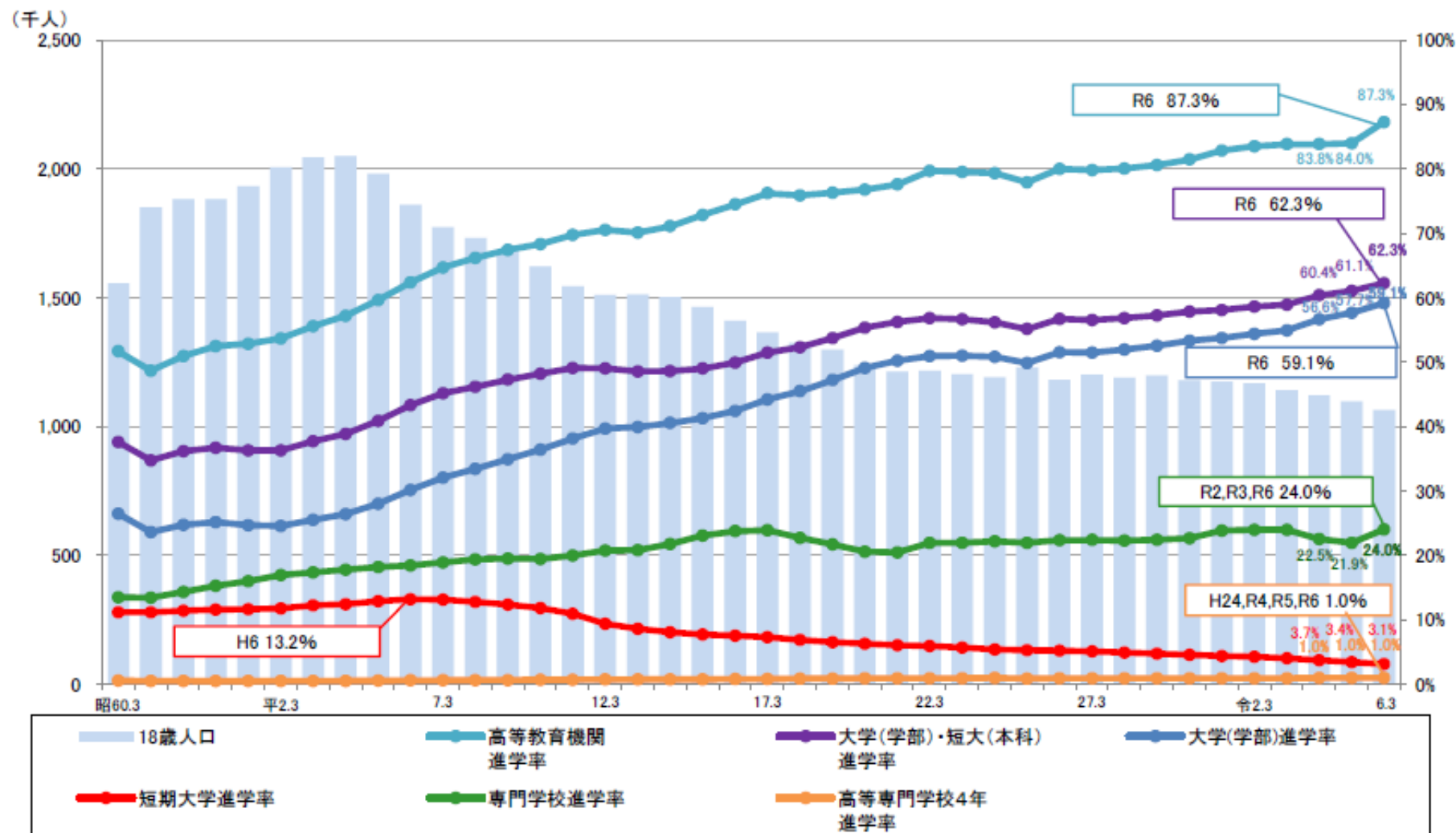
Agency (自ら考え、主体的に行動し、社会の変革を実現していく力)





1. 大学の役割

図3 高等教育機関への進学率

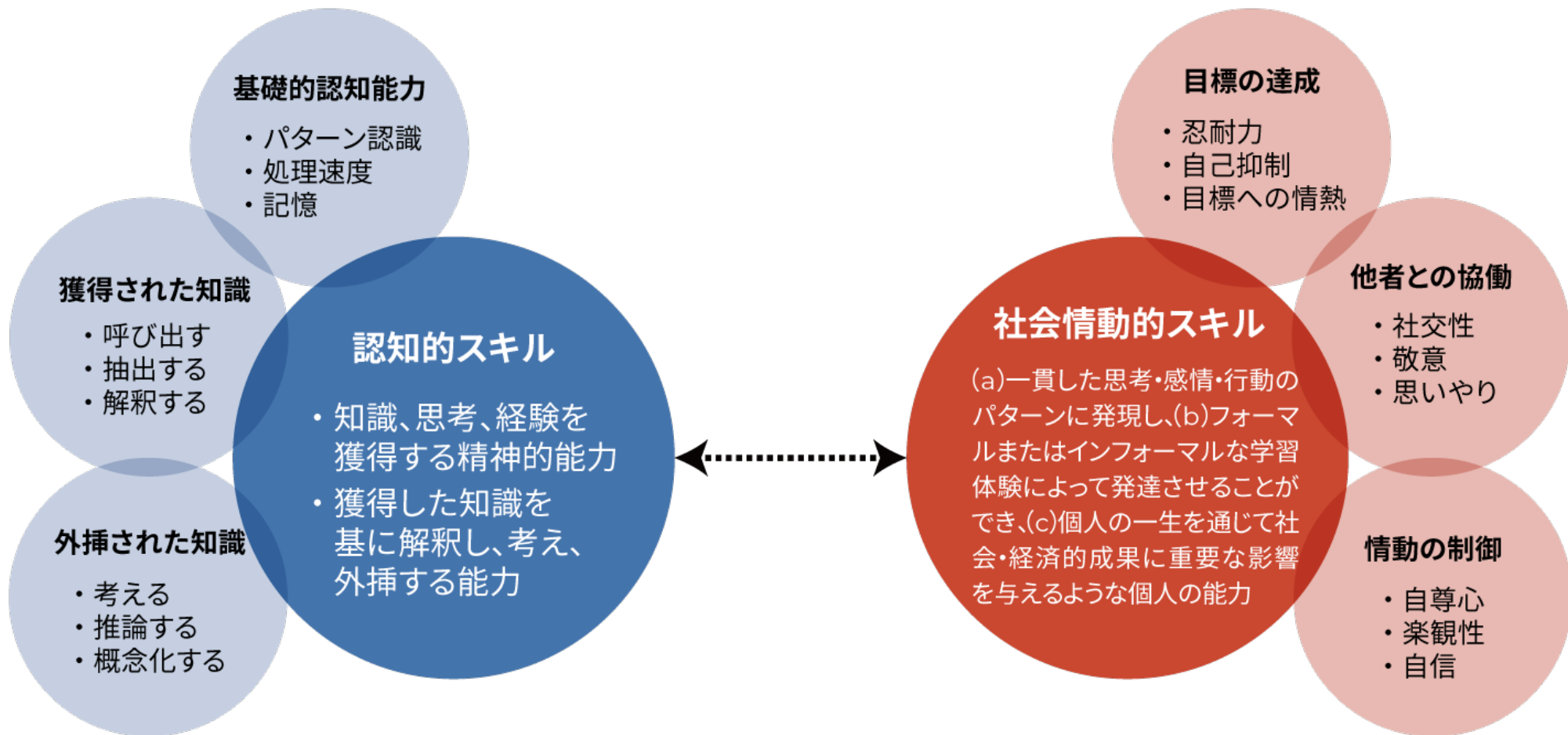


令和6年度学校基本調査(確定値)より

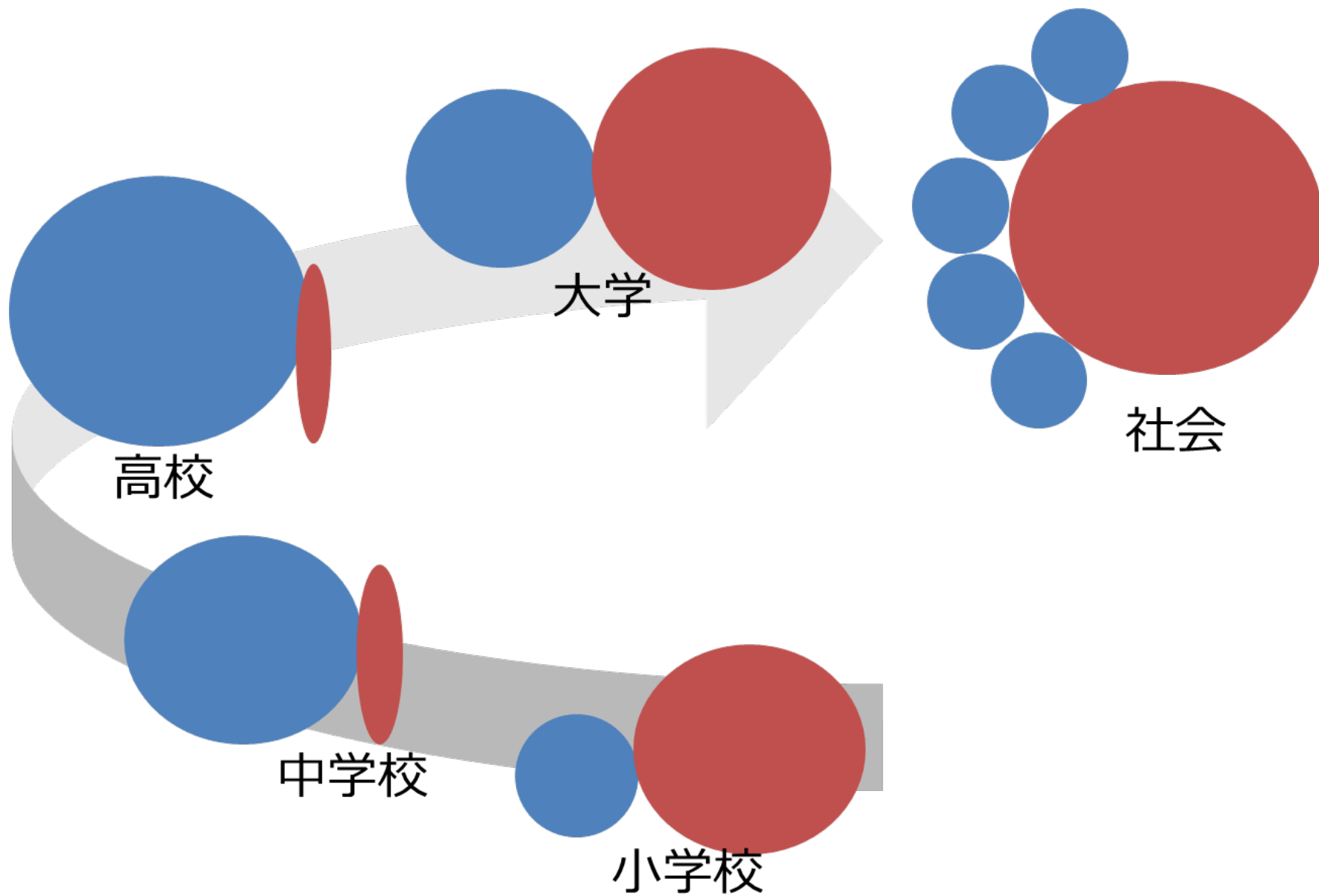
大学の社会的役割

1. 人間的成長の場＝自律的学習者
2. 学びの場＝学び方を学ぶ
3. 実体験をもとに可能性を広げる場
4. 学術研究を深める場
5. 地域貢献人材を育成する場

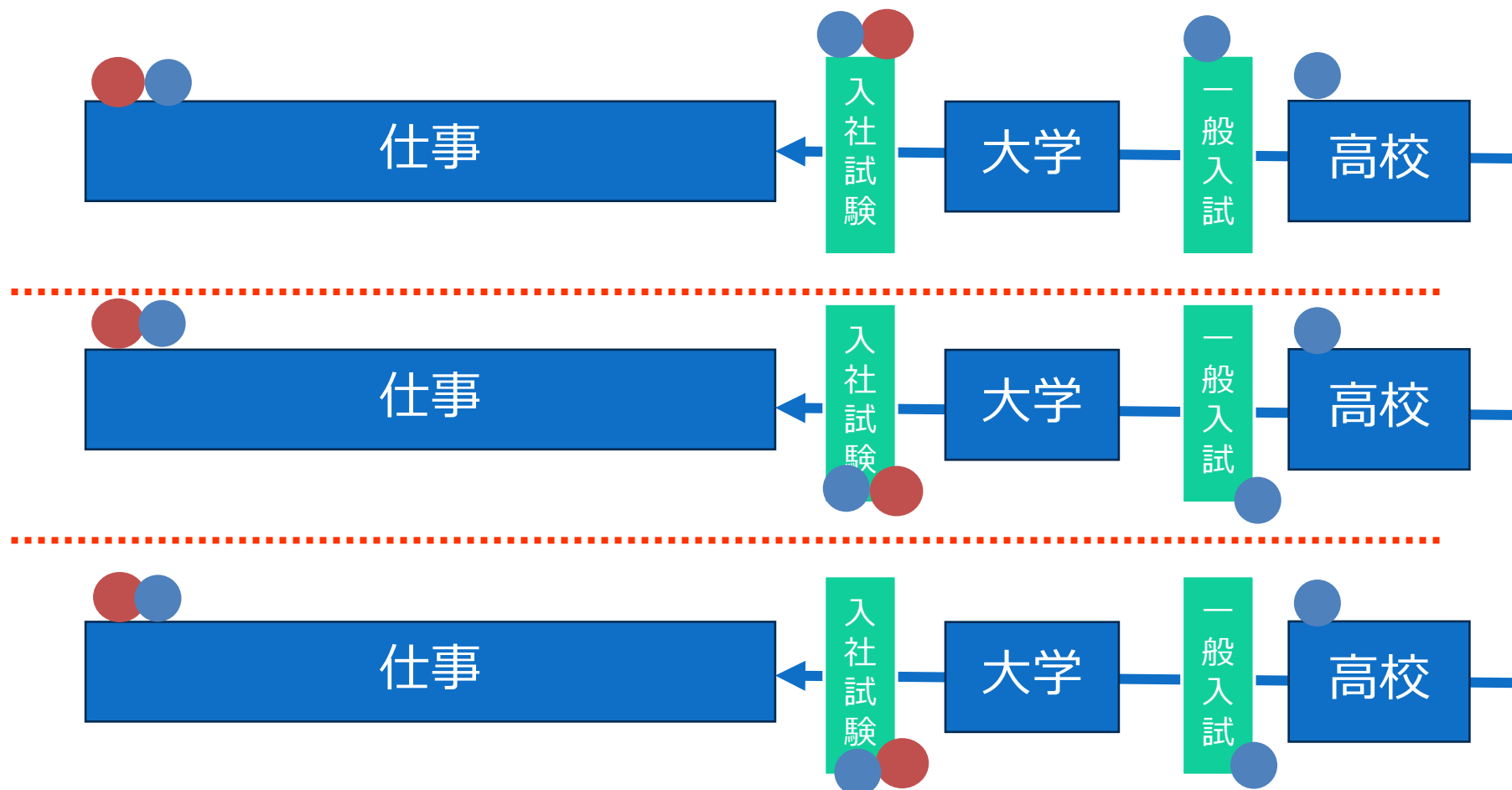
そもそも賢さとは



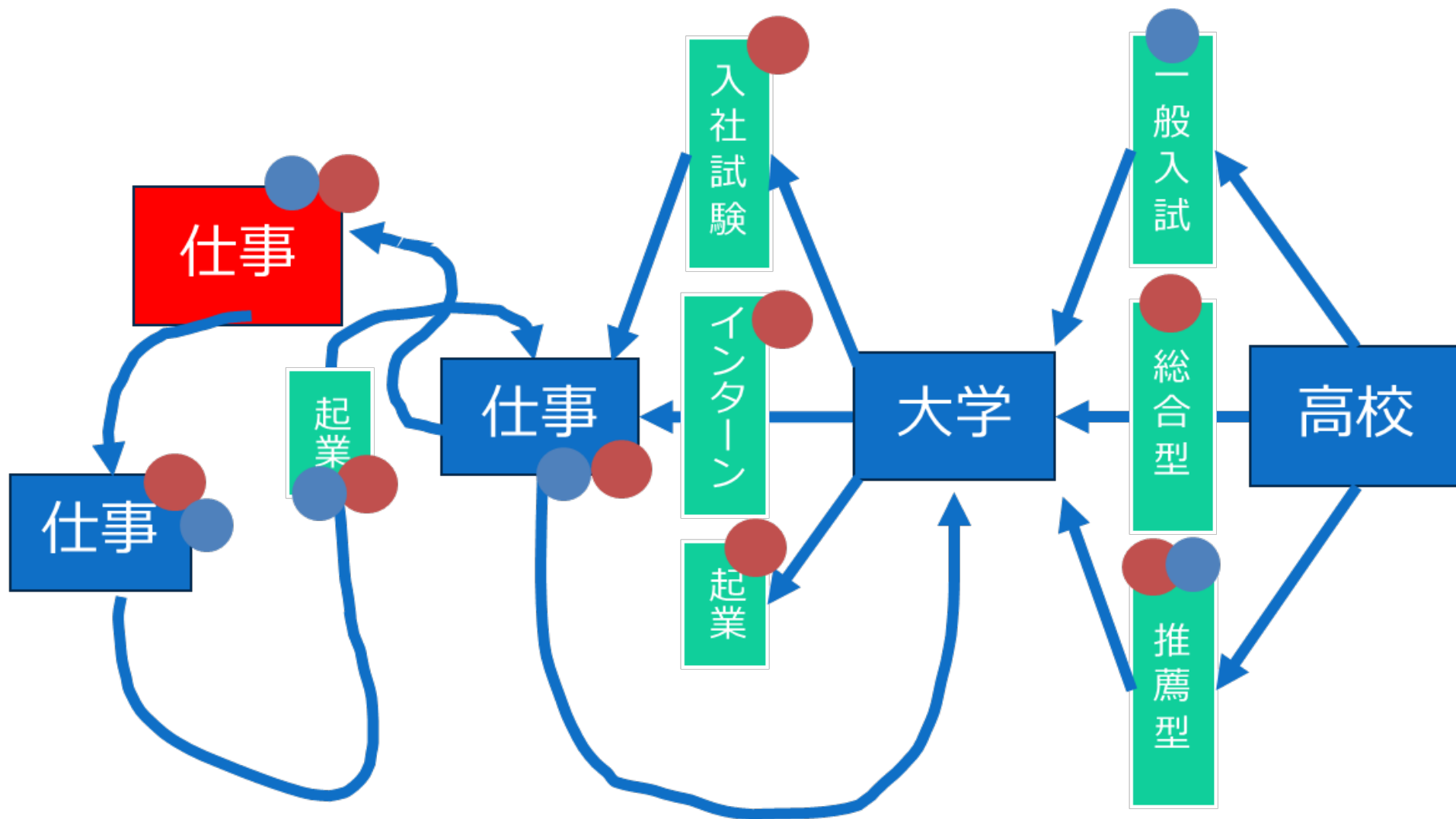
ベネッセ教育総合研究所（2015）を改変



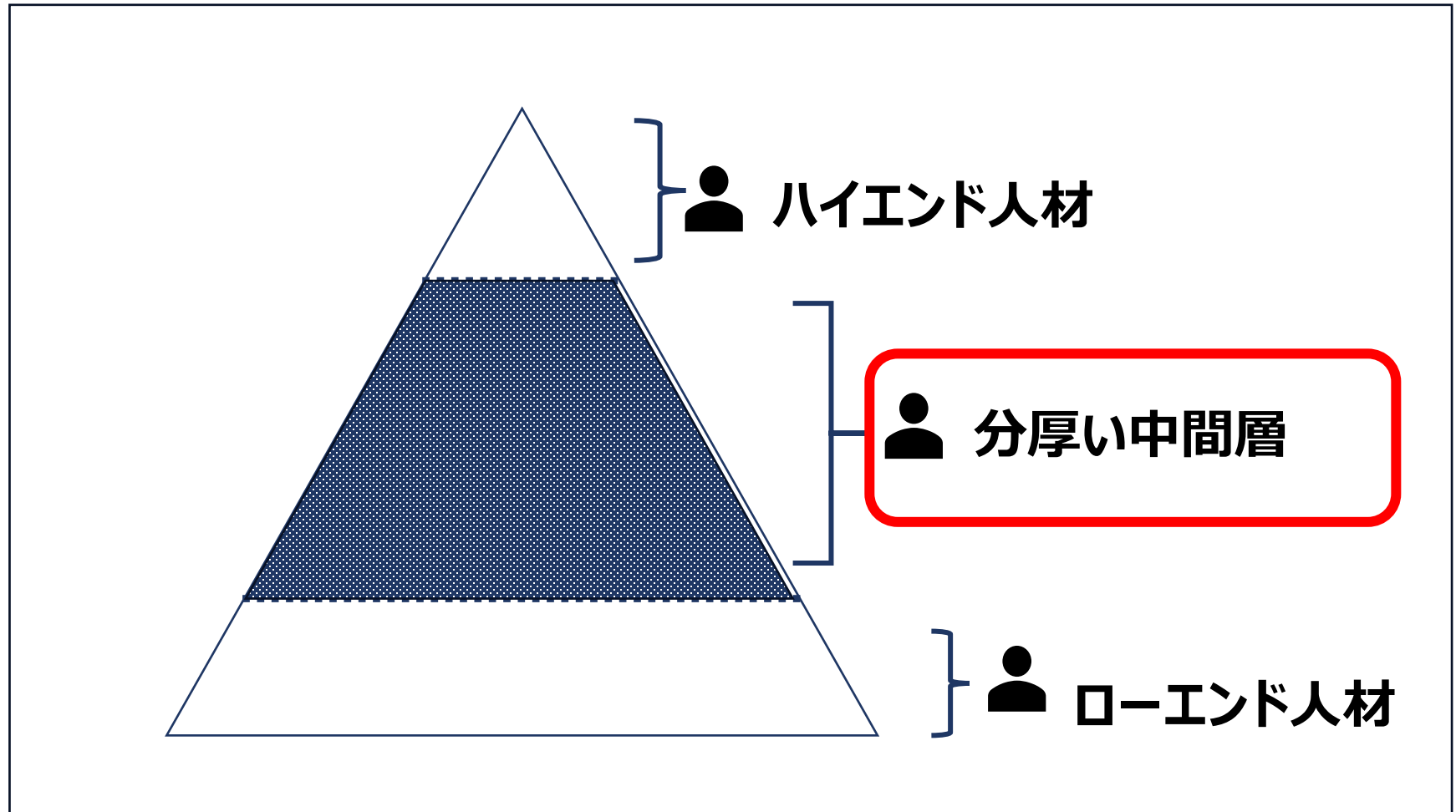
10年前の大学→社会との接続



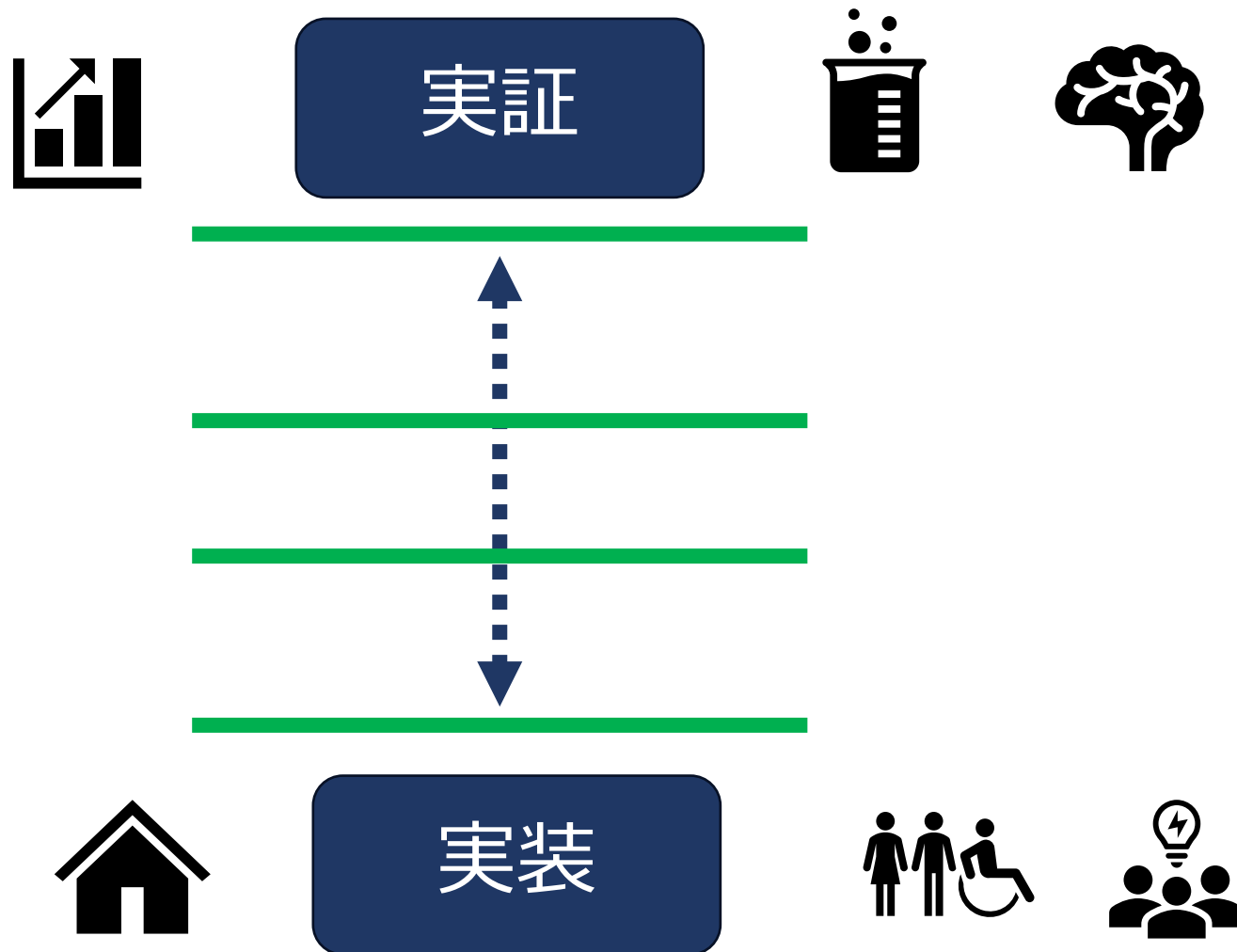
現代は複線型社会



日本の教育政策は…



研究を通じて高度化するものは何か



本学が達成したいこと

自分に自信が持てない

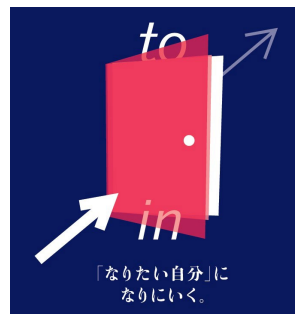
何か成し遂げた経験が少ない

周りから期待されて
がんばる経験が少ない

自分の固有の世界でしか表現できない
⇒転移できない

何をしたいか分からない

自律的学習者になり切れていない



自己を肯定でき、前に進むことができる

成功体験が豊富で、レジリエンスが高い

周囲と調和の中で、チカラを発揮する

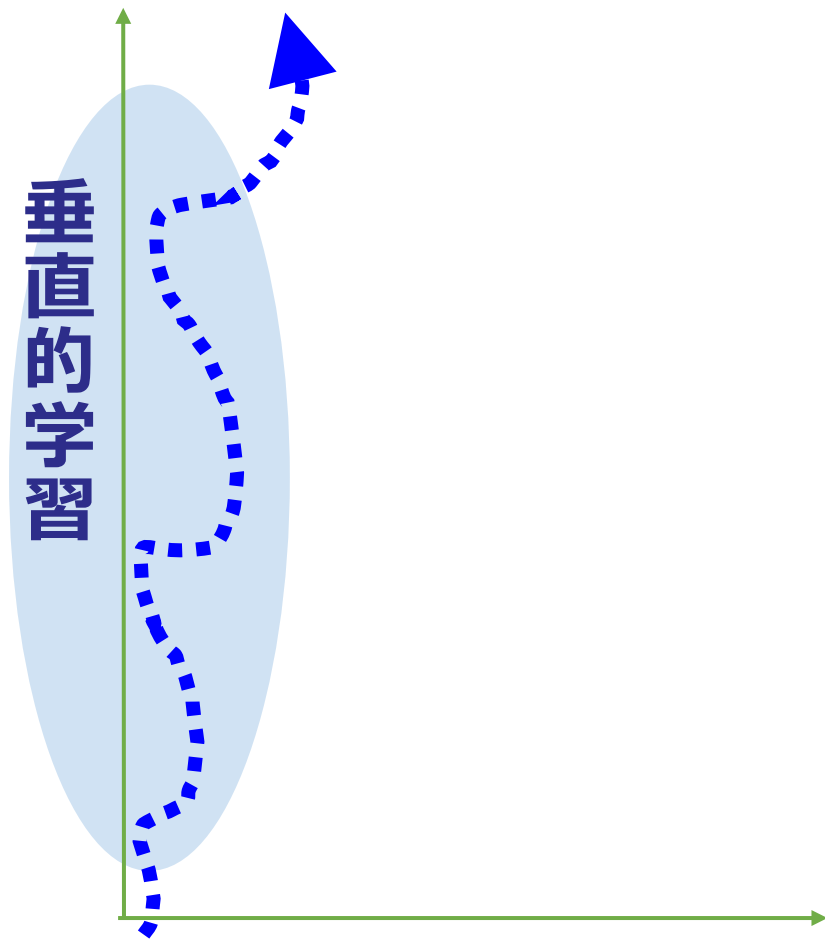
経験をもとに、新しいことに取り組むことができる

自分と社会の将来に明るい展望をもっている

生涯、自律的に学習し続けることができる



学びの方向性 縦

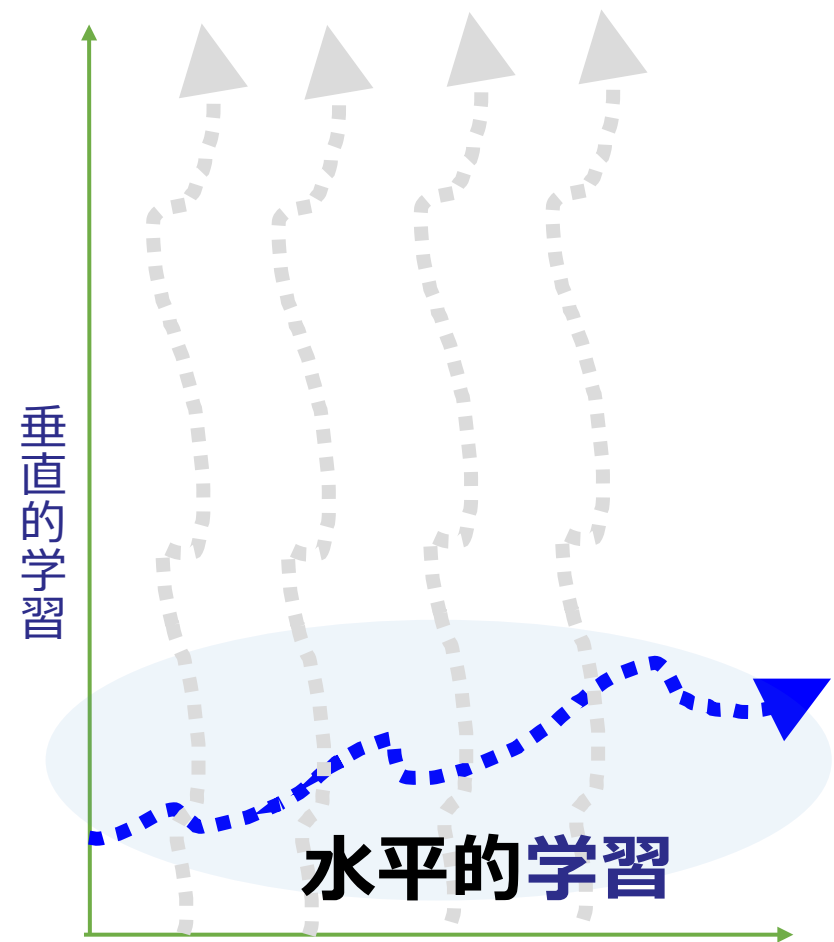


- 熟達化
- 段階的発達
- 何かが上手になったり,
早くできるようになる
- コミュニティにおける安定
した関係性
- 行為の「アタリマエ」化

(Engeström, 2001, 2004)

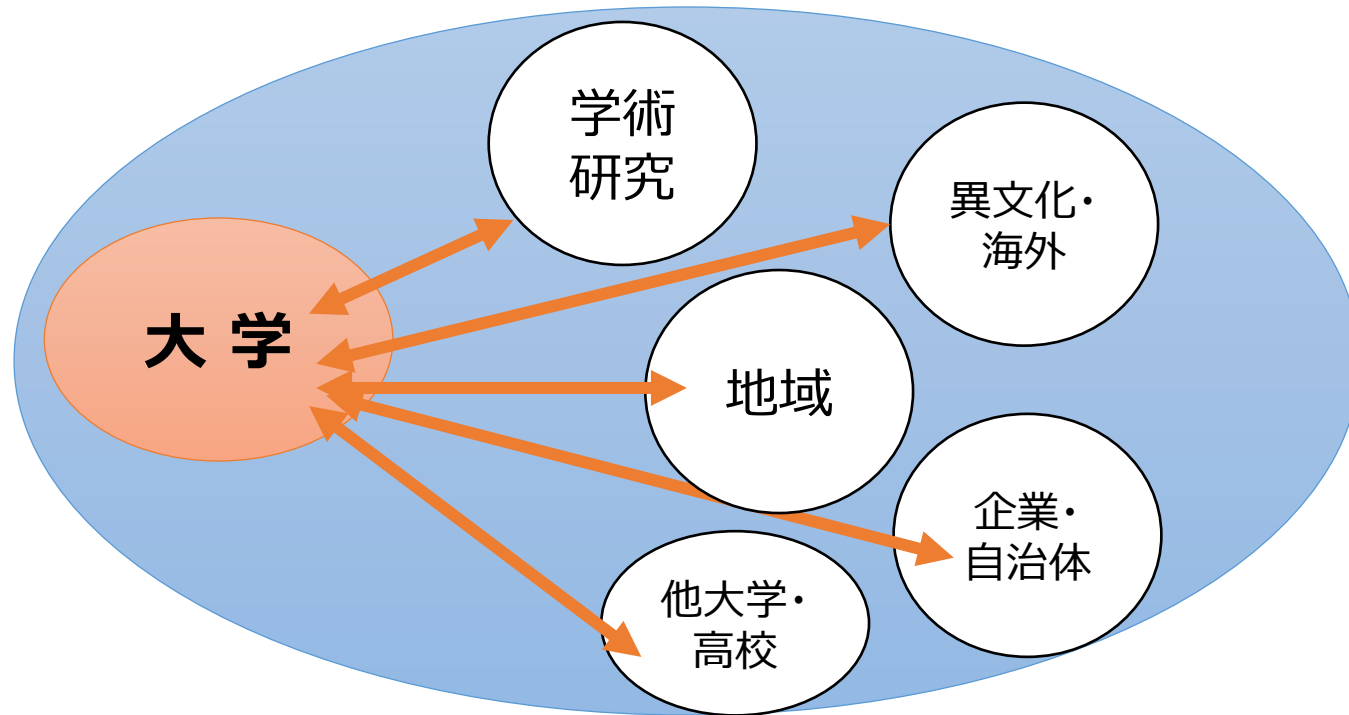
学びの方向性 横

- 異化
- 越境
- 「アタリマエ」が「アタリマエ」ではないと認識
- ものの見方, 自分自身のあり方が変化
- 価値が変化



(Engeström, 2001, 2004)

越境する学び



- 個人が所属する組織の境界を往還しつつ、自分の仕事、業務（学習）について学習、内省すること。（中原, 2012）
- 「昨今、既存の集団の枠（境界）を超え、異質な人々が穏やかに繋がり、時に組織変革や社会変化を目論む越境（boundary crossing)的な対話や学びが着目されている（Engeström
- et al., 1995, Tumomi-Gröhn&Engeström, 2013, 香川ほか2016）
個人が所属する組織の境界を越え、他の共同体に触れることで、当たり前だと思っていた価値のあり方がゆらぐ中で、所属する組織内での価値観を再構成する学びのプロセス。



**今、教育政策が行おうとしていること
一知の総和答申を読み解くー**

我が国の「知の総和」向上の未来像 ～高等教育システムの再構築～（答申）要旨①

中央教育審議会（令和7年2月21日）

1. 今後の高等教育の目指すべき姿

直面する課題

社会の変化 世界：環境問題、国際情勢の緊張化、AI進展 等
国内：急速な少子化、労働供給不足

高等教育を取り巻く変化 学修者本位の教育への転換等

大学進学者数推計 62.7万人 ▶ 59.0万人 ▶ **46.0万人**（約27%減）
（出生低位・死亡低位） (2021) (2035) (2040)

未来像・人材像

目指す未来像

一人一人の多様な幸せと社会全体の豊かさ(well-being)の実現を核とした、持続可能な活力ある社会

育成する人材像

持続可能な活力ある社会の担い手や創り手として、真に人が果たすべきことを果たせる力を備え、人々と協働しながら、課題を発見し解決に導く、学び続ける人材

高等教育が目指す姿

我が国の「知の総和」の向上

- 目指す未来像の実現のためには、「知の総和」（数×能力）を向上することが必須
- 「知の総和」の向上のためには、教育研究の質を上げ、意欲ある全ての人々が高等教育を享受できるよう社会的に適切な規模の高等教育機会を供給し、地理的・社会経済的な観点からのアクセス確保によって高等教育の機会均等の実現を図ることが必要

高等教育政策の目的

「質」の向上 : 教育研究の質の向上を図ることであり、学生一人一人の能力を最大限高めること

「規模」の適正化 : 社会的に適切かつ必要な高等教育機会の量的な確保

「アクセス」確保 : 地理的・社会経済的な観点からの高等教育の機会均等の実現

3つの目的（価値）は、常に調和するわけではなく、トレードオフの関係になることもあり得るため、価値の選択と調整が必要

急速な少子化等を踏まえた高等教育全体の「規模」の適正化を図りつつ、それによって失われるおそれのある「アクセス」確保策を講じるとともに、「規模」の縮小をカバーし、知の総和を向上するために教育研究の「質」を高める

重視すべき観点



①教育研究の観点

- ア. 未来社会を担う人材に必要な資質・能力の育成（文理横断・融合教育等）
- イ. 成長分野を創出・けん引する人材等の育成
- ウ. デジタル化の推進（AI活用等）
- エ. 国際競争の中での研究力強化



②学生への支援の観点

- ア. 学生の多様性・流動性の向上（留学生、社会人、障害のある学生等）
- イ. 学生への経済的支援充実（社会全体で支える学生の学び）



③機関の運営の観点

- ア. 高等教育機関の多様性確保
- イ. 高等教育機関の運営基盤の確立（ガバナンス改革等）
- ウ. 国際化の推進（留学モビリティ拡大等）



④社会の中における機関の観点

- ア. 社会との接続・連携強化
- イ. 人材育成等を核とした地方創生の推進
- ウ. 初等中等教育との接続の強化
- エ. 情報公表による信頼獲得

2. 今後の高等教育政策の方向性と具体的方策①

（1）教育研究の「質」の更なる高度化

1 学修者本位の教育の更なる推進

ア. 学びの質を高めるための教育内容・方法の改善

- 学生が主体的・自律的に学修するための環境構築
 - 教学マネジメント指針の見直し
 - 同時履修科目の絞り込み促進
 - レイトスペシャライゼーションを促進するための定員管理制度の弾力化等

○「出口における質保証」の促進

- 厳格な成績評価や卒業認定の実施
- 成績優秀者への称号授与等

○高大接続を踏まえた大学入学者選抜等の改善

○遠隔・オンライン教育の推進

イ. 新たな質保証・向上システムの構築

- 大学設置基準及び設置認可審査の見直し
 - 基幹教員の配置に係る基準や指導補助者の基準等について制度改善

○認証評価制度の見直し

- 在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか等を含む教育の質を数段階で評価する新たな評価制度への移行

2 多様な学生の受入れ促進（外国人留学生や社会人等）

ア. 多様な学生の受入れ推進

- 多面的・総合的な入学者選抜の推進
- 転編入学等の柔軟化
 - 転編入学の増加を図るための定員管理の見直し等
- 障害のある学生への支援等

イ. 留学モビリティ拡大

- 外国人留学生等の受入れや日本人学生の派遣の推進、国際化のための体制整備
 - 経済的支援の充実
 - 多文化共修環境整備
 - 留学生の定員管理方策の制度改善等
- 適切な在籍管理、技術流出防止対策の徹底・強化等

ウ. 社会人の学びの場の拡大

- 教育環境の整備
 - 産業界と連携した教育プログラム開発
- 産業界・地方公共団体等との組織レベルでの連携推進

エ. 通信教育課程の質の向上

- 時代の変化を踏まえた通信教育課程の在り方を見直し
 - 通信教育課程の更なる質の向上のための制度改善や学生支援に向けた検討等

3 大学院教育の改革

ア. 質の高い大学院教育の推進

- 体系的な大学院教育課程の編成の推進
 - 修士・博士5年一貫プログラムの構築（特に自然科学系）等
- 学士課程から博士課程までの連続性向上・流動性促進
 - 学士・修士5年一貫教育の大幅拡充（特に人文・社会科学系）等

イ. 幅広いキャリアパスの開拓推進

- 多様なフィールドで一層活躍するための環境構築、多様な進学者の受入れ促進
 - 学位の質保証を前提とした社会人の修士・博士の1年での学位取得推進等

4 研究力の強化

○研究の質向上に向けた研究環境の構築

- 研究開発マネジメント人材等の量的不足解消・質向上
- 大学共同利用機関等の機能強化等

○研究環境の低下要因を取り除くための業務負担軽減の推進

- 研究と教育それぞれに重点を置く教員の活用促進
- 形式的な会議の見直し等

5 情報公表の推進

○情報公表の内容・方法の改善

- 高等教育機関の情報を横断的に比較できる新たなデータプラットフォーム（Univ-map(ユニマップ)（仮称））の構築

○全国学生調査の活用



新たな高等教育の質保証・向上システムの構築に向けて（中教審）

中央教育審議会大学分科会（第178回）特別部会における 主な意見（認証評価関係）

- 大学の評価は決して偏差値で表されるものではなく、学生の満足度や就職後の追跡等による評価も必要ではないか。大学間の教育の伸び代をベースにした競争の仕組みをつくっていくことが重要で、これは日本社会全体の再生に必須である。
- 大学・大学院の教育の質を上げていかないと、海外から優秀な留学生を呼び込むこともできない。認証評価の在り方とも大きく関わっているのでは。
- 評価結果については（悪いものも含め）、世間にしっかり公表していくべき。
- 認証評価機関によって基準にばらつきがあるため、認証評価機関のメタ評価機関をつくり、国際的に通用する認証評価機関にしていけることが重要。評価も項目ごとにA、Bといった形で評価・公表しないと大学の特徴が分からない。
- 新しい評価を考える際は、学位プログラムを担っている教育機関の学部・学科レベルできちんと評価できるように考え直すべき。

答申

新たな質保証・向上システムの構築

<具体的方策>

（認証評価制度の見直し）

- 認証評価における各高等教育機関の負担軽減を踏まえつつ、教育・学修や研究の質を一層高めるため、例えば「学部・研究科等に応じた定性的評価を導入するとともに、教育研究情報に基づく定量的評価を行い、これらに基づき在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか」といった「大学等の教育の質を数段階で示した上で公表する」など、新たな評価制度へ移行するための制度改善を行う。
- 上記の新たな評価制度における評価の結果公表について、評価を受ける高等教育機関の長所や特色、指摘事項を簡潔にまとめた要約資料を作成するなど、国民に対して分かりやすい仕組みを構築する。
- 各高等教育機関における事務手続の軽減を図る観点や、新たな評価制度の充実の観点から、評価におけるデータ活用のためのデータベースの整備について検討する。

中央教育審議会

『我が国の「知の総和」向上の未来像 ～高等教育システムの再構築～（答申）』

（令和7年2月21日）から抜粋

つまり新しい認証評価の方向性は…

- 機関別から部局別評価へ
- 教育の質に特化する
- 学生がどれだけ伸びたか（学習成果）が中心
- 結果は金、銀、銅などの段階評価
- これらは公開



分厚い中間層を育成する大学が できること

VUCA時代に期待される力を整理

自ら考え、主体的に行動し、責任を持って社会の変化に関わっていることができる力

➡ 人生と学びの基盤となる力

▶ ユニバーシティ・ポリシー

桐蔭横浜大学は、すべての学位プログラムにおいて、深い教養と倫理観を礎とした専門的知識・技能を有し、主体的に社会と関わり、その中で「人生と学びの基盤となる力」を発揮することで、社会の持続可能な発展に貢献し新たな価値を生み出すことができる人材を育成します。



TOIN 6 を育む組織体制（実質的な教教分離）

ボリュームゾーン学生を成長させるため、大学をあげて組織・教育の改革を進める

非認知能力ベースの教育目標

組織的な学びのシステム

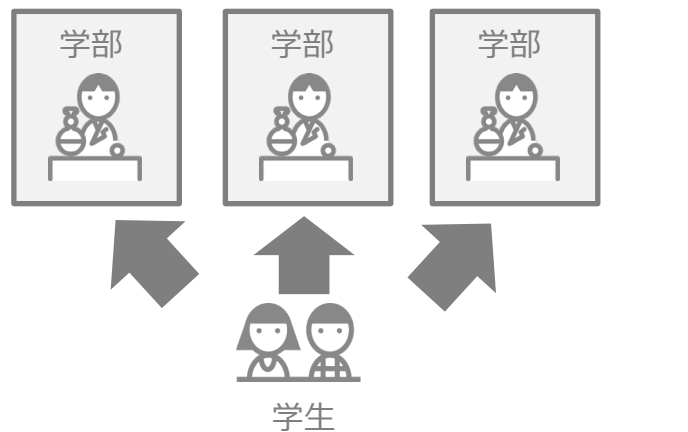
戦略的な高大・大社トランジション

学びのために全学が総動員するシステム

Student centered learning

＊実質的な教教分離方式

＊学長のトップマネジメント



Teacher centered education



Student centered learning



TOIN 6を身につける3つのプログラム

カリキュラム
(正課)



CANDLEプログラム
(準正課)

授業やゼミでは学べない
「リアルな現場」で学ぶ



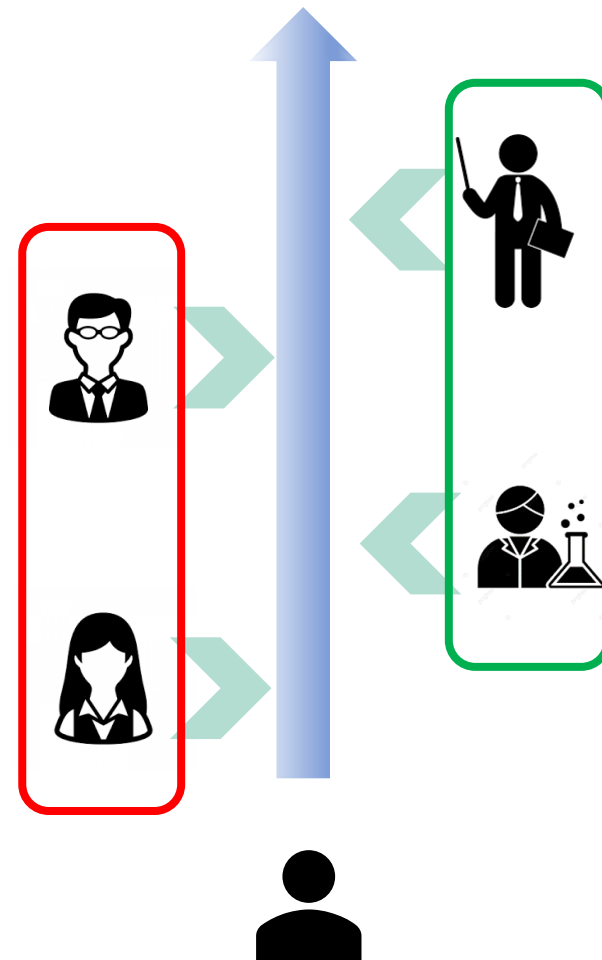
クラブ・サークル
(正課外)



私の教職協働イメージ




ユニバーシティポリシー



ショーケース（学習成果の可視化）

社会との接続 ←

The screenshot shows a 'ToIn Learning Showcase' form for the 'First year'. It includes sections for 'Personal Data' (Name, Student ID, Email), 'Present Life Story', 'Future Life Story', '6 Key Competencies' (Critical Thinking, Communication, Growth Mindset, Creative Thinking, Collaboration, Lifelong Learning), 'Assessment Data', and 'Reflection & Next Steps'.



TOIN 6を身につける3つのプログラム





クロージング

まとめ

- 大学のミッションを明確に
- 大学環境の総力を挙げて学生を伸ばす
- 教育政策としてもそれらを後押し
- 段階評価＝偏差値、立地に並ぶ3つ目の教育力評価軸
- 教員と職員は学生にかかわる大事な大人



学校法人
桐蔭学園

桐蔭横浜大学

Toin University of Yokohama

ご清聴ありがとうございました

morit@toin.ac.jp



@toin_univ

